



沖繩の幼児教育



角尾 稔

去る七月二十五日より、八月末まで、琉球政府招へいの文部省派遣沖繩講師団の一人として、那覇市で幼稚園教育の講習をしてきた。この講習は、これまで十年間毎夏行なわれてきたものであるが、幼稚園の現職教員対象に保育の専門の講座が開かれたのは、今回がはじめてであった。現地の先生方は、待ち望んでいた保育専門の講座が開かれるというので、その期待も大きかったようだ。文字通り炎熱唐をこがす暑さの中で、毎日四時間の講習を、だれ一人居眠りするものなく、一生懸命の受講振りに、講師の私も汗だくになりながら張り切らないわけにはいかなかった。

本土のどの府県よりも普及している

沖繩では一〇〇%近い子どもが保育を受けているのであるから、幼児教育の普及の点からいえば、本土のどの都道府県にも負けない普及率である。しかし、その施設・設備・保育内容の点からいえば、いくつかの幼稚園を除いては、まだまだの感を禁じ得ない。

なにしろ、沖繩では、昭和二十三年の布令によって幼稚園は義務教育とされたのである。昭和二十八年教育委員会ができて、幼稚園が市町村の教育税（以後今日まで一般の税とは別に教育のための税制をしている）によってまかなわれるようになるまで、義務教育であって、教職員は政府から給料を貰っていたのである。さて政府から教育委員会に移されて、一つには地方教育委員会の財政の貧困さから、そしてもう一つには、本土の教育に追いつこうとして小・中学校教育中心の考えから、教育委員会が教育委員会立として幼稚園の面倒を見切れなくなつて、投げ出してしまったのである。

昭和三十三年には、本土に一年おくれで、幼稚園の設置基準も施行された。そして、幼稚園を名乗り得るためには、設置者は公立——つまり教育委員会立——または、法人立でなければならなくなつた。すでに一部の富裕な教育委員会の下にある幼稚園を除いてほとんどすべての幼稚園が村長や区長から施設や給与の一部を提供されていて教育委員会立ではなくなつていたので、幼稚園の枠からはずされてしまったのである。富裕な那覇市内のような特殊なところだ

第1表 沖縄（地区別）の幼稚園・学級・園児数
（昭和38年4月20日現在）

教育連合区	公立			私立			計		
	園数	学級数	園児数	園数	学級数	園児数	園数	学級数	園児数
北部	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中部	5	20	729	2	7	188	7	27	917
那覇部	21	103	4,050	5	15	432	26	118	4,482
南部	0	0	0	2	5	138	2	5	138
宮古山	0	0	0	1	3	123	1	3	123
八重	8	16	598	2	4	106	10	20	704
合計	34	139	5,377	12	34	987	46	173	6,364

けは、それまで教育委員会が幼稚園の面倒を見てきたために、今日でも、引きつづき小・中学校並みの公立幼稚園であり、幼稚園として認可された幼稚園として、教育が行なわれているのである。第1表を見てわかるように、昭和三十八年四月現在、幼稚園数は四十六である。ここで幼稚園というのは幼稚園として認可された幼稚園である。つまり教育委員会または法人立で設置基準にて

らして幼稚園と認められた園の数である。ところが、驚くべきことにこのほかに四百余りの認可されてない幼稚園がある。現地の人たちのいう「未認可幼稚園」がある。本土の場合のように「もぐり」とか「無認可」呼ばりをしていないところが実に奥ゆかし

い。未認可だから「いまだ認可せず」の意味だ。つまりやがて認可される幼稚園というのである。未認可といえども就学前教育の重要な仕事をしているのであって、その昔は、政府立の幼稚園であったのである。例えば中部地区は認可幼稚園は七園であるが、未認可幼稚園は九八園、南部地区は認可園二に対して、未認可幼稚園一一一園という状態である。ここにあげた幼稚園のほかに、保育所は一六あり、幼稚園と手をたずさえて、就学前の幼児の保育に当たっている。

沖縄の幼稚園の先生たち

口では幼稚園教育は重要な教育だといわれながら、先生方がその仕事に見合う待遇をされていないのは、本土も沖縄も同じである。沖縄の幼稚園教諭の平均給与は、第2表に見られるように公立で四四・三〇ドル、私立で三一ドルである。小学校教諭の六割程度しか貰っていない。小学校教諭と同じ教育職として免許を有しながら、給与が低いばかりか、定期昇給、退職金の制度も不備である。そのうえ本土のように健康保険共済組合の制度がない。病気をしても自費、退職すれば、明日の食事代からなんとかしなければならぬ。全身を捧げて幼児教育に従事している先生方に、これでは余りにも気の毒だと思わずにいられない。しかも医者が少なく（都市にのみ偏在し）治療費は高いとの事である。それでも、認可幼稚園はまだいい。未認可幼稚園の先生ともなると、八ドルとか九ドルの給与で働いている方たちはざらである。八ドルといえは二千八百八〇円だ。

よくこんな給与で……と思わずに
 いられない。

だがそこが沖繩だ。こんな話を
 聞いたことがある。村長さんや区
 長さんに両親が、お宅のお嫁さん
 (娘さん)に幼稚園の先生をして
 もらいたいのだが、とたのまれる
 と、両親も公の仕事のことだし、

いやとはいえない。「ハイ」と返事をしてしまうと、祖先崇拜、親
 思いの沖繩のことだ、どうしても勤めないわけにはいかないとこの
 とである。それだけに、幼稚園の先生は名誉職めいたところもある
 のだろう。

保育者養成

沖繩には、幼稚園教諭・保育所保母養成のための授業は大学で開
 設されていないし、また『養成所』もない。それ故、幼稚園教諭とな
 るためには、高校卒業後、認定講習の積み重ねによって免許状を取得
 するか、本土に渡って大学や養成所などを卒業して資格を取って
 くる方法がとられている。今回私が招へいされたのは、免許状の保育
 内容の単位を与える講習をするためであるが、それは沖繩ではじめ
 て開かれた幼稚園教育の専門の授業であった。これまでは、小学
 校の各科教育の授業により単位をとって振り替え、幼稚園の専門の

第2表 幼、小教員の給与
 (単位ドル)

幼 稚 園	公 立	\$ 44, 30
	私 立	31, 00
	総 平 均	42, 30
小 学 校	公 立	76, 81

単位とすることが行なわれていたとのである。ここで、私ごと
 まどったことがあったのであるが、夏期講習は現職者に対する。上級
 免許状取得のための不足単位を与える認定——現職教育——をたて
 まえとするため、受講生は現職者であることが条件であった。未認
 可幼稚園は認可以前の幼稚園であって、そこに勤める者は厳密な意
 味での幼稚園の現職者ではない。したがって、教室の余裕のある範
 囲において、未認可幼稚園の先生方も受講が許可されたのであった。

未認可幼稚園であるため、そこに勤める先生方にとっては、思い
 もよらない問題があった。たとえば、かつて、義務設置させられて
 いた時代は、真の意味での幼稚園教諭であった人も、今日では、未
 認可、したがって、同じ場所で同じように勤めていながらも、途中
 から幼稚園としての経験年数は切れてしまっている。単位はとって
 も経験年数が不足して上級免許状に切り替えられないといった状態
 である。また、本土の大学を卒業して、中学の免許状をもって
 いて、幼稚園の経験年数と認定講習の単位によって、幼稚園の免許
 状が取得できることになっていても、勤務先が未認可のために単位
 が生かされず、免許状が出ないという人もいた。それなら、自分の
 勤務先を幼稚園として認可してもらえば——つまり教育委員会立と
 してもらって幼稚園の認可をとれば——いいではないかと思うので
 あるが、それには、免許状を持っている者がいないから、幼稚園と
 して認可されないという事実もあるのである。

沖繩で幼稚園の先生を本格的に養成する機関を設けるとか、未認可幼稚園に勤務する先生方に資格をとらせるといふ大きな仕事がある。しかし、文教局の義務教育課の赤嶺貞義事務官は誠実この上ない人格者であり、しかも幼稚園教育に深い理解と心の底から湧き出る情熱の持主である。この最適人者のもとに琉球大学でも、幼稚園の専門の授業をいわゆる拡張講座として開設される——私も学長にお願いにいったのであるが——気運となつてい

るし、米年以後も、さらに幼稚園教育の認定講習も数多く開設されそうなる見通しになつてきた。沖繩の幼稚園教育は既に実質的に本土をしのぐ普及率をもっているのであるから、今後は教員の質的向上と、施設設備の拡充によつて、質的にも決して本土に負けないようなものになる日が近いことであらう。

幼稚園の施設・設備など

公立の認可幼稚園の大半を占める那覇地区の幼稚園は、すべて小学校に併設されており、そのいくつかは、本土の優秀な幼稚園に

比して決してひけをとらないものであった。しかし、園舎だけはフロク作りでも、便所は別棟の至つてお粗末であるところ、遊具や設備の点ではまだまだのところが多いようである。

未認可幼稚園の多くは、公民館を使用して、幼稚園としての運営をしていくには、大きな障害となることも多いようである。にもかかわらず、そこに勤務する先生方は非常に熱心で、全く頭の下がる思いがするほど一生懸命である。保育環境も整つておらず、生活も安定していない中ではあるが、この人たちが、いるからこそ、沖繩の幼児たちが、幼児教育を受けることができ、家では方言しか使っていないような子どもも、小学校に入学して、きつとまどわずに学校教育を受けることができるようにしてもらっているのだから、沖繩はいま、学力向上を叫んで懸命の努力をしているが、学力向上の基盤を作っているのは、これらの未認可を含めた幼児教育者といつてよからう。

(東京堂々大学)

幼児の教育 第六十三巻 第一号

一月号 © 定価六〇円

昭和三十八年十二月二十五日 印刷
昭和三十九年 一月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします。